

ネルヴァルとタッソの『解放されたエルサレム』

間 瀬 玲 子

Nerval et *la Jérusalem délivrée* du Tasse

Reiko MASE

I. 序

19世紀の作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は作品内において16世紀イタリアの作家トルクァート・タッソ Torquato Tasso (1544–1595) の長編叙事詩『解放されたエルサレム』(1575年) (*Gerusalemme liberata*、フランス語訳 *La Jérusalem délivrée*) をかなり頻繁に言及している。第1回十字軍遠征におけるキリスト教騎士と異教徒騎士の壮絶な戦いをテーマとしている。魔女アルミーダが騎士リナルドと恋に落ちて、二人はアルミーダの迷宮で愛に溺れる。しかし結局キリスト教騎士がリナルドを戦場に連れ戻す。『解放されたエルサレム』は多くの楽曲・オペラ・絵画にテーマを提供してきた。例えば絵画ではフランソワ・ブーシェ François Boucher 『リナルドとアルミーダ』 *Renaud et Armide* (1734年ルーヴル美術館) ではアルミーダがリナルドを宮殿に引き止めようとしている場面が描かれている。絵画の右側には二人の騎士がリナルドを救うために潜んでいる。

従来『解放されたエルサレム』第14歌がネルヴァルの『オーレリア』 *Aurélia* (1855) に与えた影響に限定して論じられてきた。つまり『解放されたエルサレム』第14歌における地下の流れの描写と『オーレリア』の地球の内部の描写との間に類似性があると指摘されてきた。(1)

本論文では『解放されたエルサレム』第14歌にとらわれずに、ネルヴァルの諸作品に与えた影響をテキストを詳細に読むことによって掘り下げたいと考える。

II. ネルヴァルによる『解放されたエルサレム』の記述

ネルヴァルは諸作品において『解放されたエルサレム』を言及した。彼は幾つかの雑誌や新聞に仕事として劇評を掲載していた。その一つが『ラ・プレス』紙 *La Presse* である。この新聞は、エミール・ド・ジラルダン Émile de Girardin によって1836年に創刊され、1928年まで続いた。ネルヴァルは1846年10月19日号において「シルク・オランピック劇場『アンリIV世』 サン＝チレルとミシェル・ドラポルト氏の16場の戯曲」 *Cirque-Olympique 《Henri IV》, pièce en seize tableaux de MM. Saint-Hilaire et Michel Delaporte* と題する文章を掲載している。『ラ・プレス』紙は4ページで構成されている。ネルヴァルの記事は1ページ目の下三分の一と2ページ目も下三分の一を占

めている。劇評が新聞全体の中で占める割合が非常に高いと言える。4ページ目の大半は宣伝に割かれている。さてその記事の一部を引用してみよう。

Le poème de M. de Voltaire n'est pas amusant, mais la pièce nouvelle l'est moins encore et donnerait tout au plus l'idée de cette *Henriade travestie*, dont un des chants, celui des séductions de Gabrielle (imité du Tasse), commence ainsi :

*Aux bords de l'Ithon et de l'Eure,
Où le poisson se mange au beurre,
Et à toute autre sauce aussi,
Est un paysage fleuri,
Où, grâce aux soins de la nature,
Les chardons viennent sans culture,
Ce qui fait que partout ailleurs,
Il n'est pas de baudets meilleurs ! (2)*

ヴォルテール氏（18世紀の哲学者）の詩（『ラ・アンリアッド』 *La Henriade*）はおもしろくない。しかし新しい戯曲（『アンリIV世』）はさらに面白くないし、せめてこの『変装したアンリアッド』の考えを伝えているのであろう。その歌のひとつ、ガブリエルの誘惑（タッソをまねて）の歌は次のように始まる :

イトン川とウール川のほとり
そこでは魚がバターで食べられている
そして他のソースもまた
花咲く風景
そこでは、自然の細心さのおかげで
アザミが栽培せずにやってくる
それによって他の到る所で
よりよいロバはいない。

この記事の一節にはかなり説明が必要である。この戯曲はフランスのブルボン朝初代の国王アンリIV世（在位 1589年から1610年）を主人公としている。この戯曲のコピーをフランス国立図書館に依頼して入手した。1846年10月17日、シルク・オランピック劇場で初演されている。ネルヴァルの記事の表題と違い、3幕16場の戯曲である。この戯曲の舞台は1553年のポーの城で始まっている。(3)最も重要な登場人物はアンリIV世とガブリエル・デストレ（以下はガブリエル）である。ネルヴァルはこの劇評において戯曲『アンリIV世』を特に褒めているわけではない。実際に戯曲を読むとあ

まり特筆すべき点はない。強いて言うならば、第2幕のアンリとガブリエルの食事の場面を注目すべきであろう。

さて上記の記事に出てくるヴォルテール氏の詩は明らかに『ラ・アンリアッド』である。ただし1723年に出版された時の最初の題名は『カトリック同盟』*La Ligue*であった。その後1728年にロンドンで出版された本の題名が『ラ・アンリアッド』である。本の随所に挿絵が掲載されている。挿絵の大半は戦いを描いている。(4)

そしてネルヴァルが劇評の中で引用までしている作品はフージュレ・ド・モンブロン Fougeret de Monbron の『滑稽な詩で変装したラ・アンリアッド』*La Henriade travestie en vers burlesques* (1745) である。(5)フージュレ・ド・モンブロンは18世紀の文人である。彼のこの作品は18世紀に非常に普及した作品であり、ヴォルテールの『ラ・アンリアッド』のパロディである。なお元の本と歌の数は合わせてあるが、一字一句を真似たパロディではない。ネルヴァルのプレイヤッド版の編者が指摘しているように、ネルヴァルは『変装したラ・アンリアッド』の第8歌の一部を劇評に引用した。ネルヴァルの引用を原文と比較すると、多少単語や句読点に間違いがある。(6)

ヴォルテールの『ラ・アンリアッド』第9歌は愛の神殿でアンリIV世がガブリエルのもとで引き止められるが、側近モルネー Mornay により戦場に戻るといふ非常に重要な場面が描かれている。特に食事の場面はない。しかし『変装したラ・アンリアッド』は第9歌で食事をして体調不良になる場面が描かれている。そこでネルヴァルはシルク・オランピック座で上演された『アンリIV世』2幕のアンリIV世とガブリエルの食事の場面を見た時に、『変装したラ・アンリアッド』第9歌を想起したのだと考えられる。

『ラ・アンリアッド』と『変装したラ・アンリアッド』のアンリIV世とガブリエルの愛の場面を読んで、タツソの『解放されたエルサレム』におけるアルミーダがリナルドを誘惑する場面を想起することがネルヴァルだけであるという証拠は何もない。しかしこれらの三つの作品がネルヴァルの想像力の中で強固な結びつきを持っていることに大きな注意を払うべきだと考える。

さて『解放されたエルサレム』がネルヴァルの中でどれくらいの位置を占めていたかを表す文章を引用してみよう。1841年4月29日ルイ・ペロー Louis Perrot 宛ての書簡にネルヴァルは次のように記している。

La maison Blanche est aujourd'hui le palais d'Armide. Prenez garde de vous laisser arrêter comme moi dans les *lacs* d'une foule de beautés réunies en cet Élysée. (...) Nous verrons si je suis vraiment Renaud et si vous êtes vraiment le brave Ubalde. (...) Relisez seulement le Tasse et la *Henriade*, où l'Arioste et croyez-moi, tout au plus, l'infortuné Astolfe, dont la raison s'était perdue *dans les bouteilles*. (7)

ブランシュ病院は、今日はアルミーダの宮殿です。この楽園に集まる美女の群れの湖の中で私のように捕まらないように気をつけてください。(中略) 私が本当にリナルドか、あなたが本当に勇敢なウバルドかがわかるでしょう。(中略) ただタツソと『ラ・アンリアッド』またはアリ

オストを読み直してください。そしてせいぜい私のことを《瓶》の中に理性を失った不幸なアストルフとしてみてください。

ペローは内務省の官吏で、演劇作品の検閲を行っていた。(8)ネルヴァルはこの時期はモンマルトルにあるブランシュ医師の病院に入院しており、この手紙の中でブランシュ医師から「ペロー氏を夕食に招待するように」との言葉を伝えている。(9)

この手紙から読み取れるのは、ネルヴァルが自らをアルミーダの誘惑に負け、アルミーダの宮殿に捕らわれたリナルドにたとえていることである。またネルヴァルの勘違いではあるが、自分の理性を瓶の中に閉じ込められたアストルフだと思っている。

このようにあまり長くない手紙の中にタッソの『解放されたエルサレム』の登場人物であるリナルド、アリオストの『狂えるオランダ』のアストルフ、そしてヴォルテールの『ラ・アンリアッド』が言及されていることに注目しておく必要がある。

またネルヴァルは『10月の夜』*Les Nuits d'octobre* (1852) の21章において次のように書いている。

Or, le vrai, c'est le faux, du moins en art et en poésie. Quoi de plus faux que l'*Illiade*, que l'*Énéide*, que la *Jérusalem délivrée*, que la *Henriade*? — que les tragédies, que les romans? (10)

ところで真は嘘である。少なくとも芸術や詩では。『イーリヤス』や『アイネーイス』や『解放されたエルサレム』や『ラ・アンリアッド』以上の嘘があろうか？ 悲劇や小説以上の嘘があろうか？

この引用文のように、ネルヴァルの想像力の中で世界文学の作品として『解放されたエルサレム』や『ラ・アンリアッド』が並列されていると考えたほうがより自然なのかもしれない。

Ⅲ. 『解放されたエルサレム』のフランス語訳

さてここでネルヴァルが参照したと考えられる『解放されたエルサレム』のフランス語訳の検討をしたいと考える。

『解放されたエルサレム』のフランス語訳に関しては、リーヴル・ド・ポッシュ版にフランス語訳一覧表が掲載されている。(11)この中でネルヴァルが活躍した時期よりも前に出版され、かつネルヴァルと関わりがあると考えられる翻訳を検証した。可能な限り書籍または電子テキストを入手して精査した。その結果詳細に検討すべき翻訳はかなり限定されることが判明した。その中でも注目すべき翻訳は以下の二点である。

1. フィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳 Philipon de la Madelaine (1841年)

第一に注目すべき翻訳はフィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳である。(12)原書を入手して詳細に検討した。書誌事項は注に記載している。(13)まず発行された年号が1841年であり、ネルヴァルが新聞や雑誌等に記事を書いていた時期と重なっている。次にネルヴァルの友人であるセレストン・ナントゥイユがバロンと共同で多数の挿絵を描き、この本に収録されている点が非常に重要である。この翻訳は元の形式とは違って小説風で読み易い。(14)

『解放されたエルサレム』第14歌には、河口に到着した二人の騎士カルロとウバルドが全身を白衣に包んだ老人が水の上を滑るように近づいてくるのを見る場面がある。挿絵には水上の老人が小さくそして薄い色で描かれている。こちら側には二人の騎士が甲冑に身を包み、驚きでのけぞっている。残念なことに二人の顔の表情は見えない。(15)ところが2ページ後には、老人と二人の騎士の表情がはっきりと描かれた挿絵が掲載されている。(16)

挿絵画家が最も力を入れたであろう第15歌の挿絵を見てみよう。二人の騎士は大変な苦勞をしてアルミーダの宮殿に入っていく。そこで身体の大半を露出している女性を見て、二人の騎士が見ている姿が描かれている。(17)そして第16歌で二人の騎士により、リナルドかアルミーダから離れる姿が描かれている。絶望で打ちひしがれたアルミーダと未練を断ち切ろうとしているリナルドの姿は見るものの心を打つ。(18)

以上のようにフィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳は読みやすい文体、豊富な挿絵により、ネルヴァルが『解放されたエルサレム』に対する理解を深めたことは容易に理解できる。しかもその豊富な挿絵を描いた画家のひとりが友人ナントゥイユであることは重要な点であろう。

2. バウール＝ロルミヤン Baour-Lormian 訳 (1796年)

バウール＝ロルミヤン訳の1796年版と1821年版(改訂版)を入手して検討を重ねた。1796年版と1821年版では使われている単語に違いがある。(19)

ネルヴァルはバウール＝ロルミヤンを作品中で数か所言及していることが、その翻訳を注目する理由である。バウール＝ロルミヤン(1770-1854)はフランスの詩人であり作家である。1812年にオペラ『解放されたエルサレム』を発表している。1815年にはアカデミー・フランセーズの会員に選ばれた。

例えばネルヴァルは『アカデミー―幕韻文風刺喜劇』*L'Académie, Comédie satirique en un acte et en vers* (1826)においてバウール＝ロルミヤンを《Baour l'ondoyant》「移り気なバウール」と表現している(20)。この作品全体がアカデミー・フランセーズ批判であり、ネルヴァルはバウール＝ロルミヤンを褒めてはいない。

またネルヴァルは『アルチスト』誌 *L'Artiste* 1844年9月29日号の「ディオラマ、オデオン座」*Diorama. Odéon* で次のように述べている。

— 《Que tu es heureux d'être poète ! disait un jour David à Baour-Lormian. Tu veux peindre un amour dans les Alpes, tu décris tes amants, tu décris tes Alpes, tu fais vingt pages d'amants, vingt pages de montagnes, et tout cela va fort bien ensemble. Moi, au contraire, si je veux en faire un tableau, ou j'ai des amants grandioses et des Alpes toutes petites, ou j'ai des Alpes gigantesques et des amants pas plus hauts que ça.》⁽²¹⁾

ある日ダヴィッド（フランスの画家）はバウール・ロルミヤンに次のように言った「君は詩人で幸福だ！ 君がアルプスでの恋を描きたければ、君は恋人を描き、君はアルプスを描く。君は恋人の20ページ、山の20ページを書く。実にそれらがすべて共にうまくいく。逆にもし私がそれを絵に描きたいとするならば、大きく描いた恋人ととても小さいアルプス、または巨大なアルプスとこれよりは大きくない恋人たちを描く。」

ネルヴァルのプレイヤッド版の編者は注においてダヴィッドのこのセリフの信憑性を保証できないと書いている。⁽²²⁾しかしここで重要なのは文章の信憑性ではない。ネルヴァルがバウール・ロルミヤンという名前を知っていたことである。

もう一つの重要な点は、バウール・ロルミヤンの詩、ペルシュイ Persuis の音楽による『解放されたエルサレム』のオペラ *Jérusalem délivrée opéra en cinq actes* が1812年9月15日、帝室音楽アカデミー劇場で初めて上演されたことである。⁽²³⁾このオペラそのものには特筆すべき点はない。またネルヴァルは年齢的に考えて、初演を見た可能性はない。

ネルヴァルがバウール＝ロルミヤン訳を参照した可能性はあまり高くはない。しかし無視できないのは、ネルヴァルがたとえ批判の対象であったとしても、バウール＝ロルミヤンの名前やその業績を知っていたことがわかっているからである。

IV. ネルヴァルの『オーレリア』は影響を受けたのか？

ネルヴァルは『オーレリア』第1部第4章を執筆する際に本当に『解放されたエルサレム』から影響を受けたのであろうか？ マリア＝ルイザ・ベレーリ Maria-Luisa Belleli はジャン・リシェ Jean Richer が編集した『オーレリア』の注釈本（1965年）で、『解放されたエルサレム』の第14歌の描写を指摘している。その際に多少不正確ではあるが、上記のフィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳を引用している。⁽²⁴⁾

ネルヴァルのプレイヤッド版の該当するページの注において『解放されたエルサレム』への言及は何もない。ただしネルヴァルの『火の娘たち』*Les Filles du Feu*（1854）の「アレクサンドル・デュマへ」À Alexandre Dumas の《la vision du Tasse》「タッソの幻」という表現⁽²⁵⁾に対してプレイヤッド版では上記のベレーリ氏の論文（1963年発表）で言及されたバウール＝ロルミヤン訳（1821年版）を引用している。⁽²⁶⁾つまりプレイヤッド版はベレーリ氏の研究を無視しているわけではないことを特に記しておく必要がある。

このように現在では『解放されたエルサレム』が『オーレリア』第1部第4章に与えた影響を注釈書で言及する研究者はほとんどいないのが現状である。しかしここで再度検討してみたい。

それでは該当するネルヴァルの『オーレリア』第1部第4章を引用してみよう。

…je crus tomber dans un abîme qui traversait le globe. Je me sentais emporté sans souffrance par un courant de métal fondu, et milles fleuves pareils, dont les teintes indiquaient les différences chimiques, sillonnaient le sein de la terre comme les vaisseaux et les veines qui serpentent parmi les lobes du cerveau. (27)

私は地球を貫く深淵の中に落ちたように思った。苦痛もないままに溶けた金属の流れに運ばれるのを感じた。その色合いが化学的な違いを示していた無数の河が、脳葉の間を蛇行する管や静脈のように地球の内奥を縦横に走っていた。

それでは次にタツソ『解放されたエルサレム』第14歌の該当する箇所を引用してみよう。なおもともと『解放されたエルサレム』は韻文で書かれている。

バウール＝ロルミヤンによる韻文訳（1796年版）

Plus loin, sur des cailloux, un fleuve impétueux
Traîne un sable liquide et des flots sulfureux :

（もっと遠く、小石の上で、激しい流れの河が液体の砂と硫黄質の河を引きずる :）(28)

バウール＝ロルミヤンによる韻文訳（1821年）

Plus loin, sur des cailloux un ruisseau ténébreux
Roule un argent fluide et des flots sulfureux.

（もっと遠く、小石の上で闇の真っ暗な小川が液体の銀と硫黄質の流れを動かす。）(29)

フィリボン・ド・ラ・マドレーヌによる散文訳（1841）

Pus bas, ils découvrent un ruisseau qui roule du soufre et du vif-argent. (30)

（もっと下で、彼らは硫黄と水銀からなる小川を見つける。）

そこで念のためにガルニエ社から発行された対訳本（1990年発行）のフランス語訳の箇所を引用してみよう。

Ils rencontrent plus bas un fleuve, qui roule
du soufre fluide et du mercure brillant

（彼らはもっと下に河と遭遇する、それは液体の硫黄と輝く水銀から流れる(31)

最後に日本語訳（岩波文庫）を引用してみよう。

気づいてみればさらに下には一筋の水路が走っていて、そこを流れてゆくのは瑞々しい硫黄と鮮やかに揺らめく水銀なのだ。(32)

ネルヴァルは『オーレリア』第1部第4章を執筆する際に、地球の内奥や金属の流れという観点から、『解放されたエルサレム』から影響を受けたと考えてもよいと思われる。しかもフィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳の影響のほうがより説得力がある。パウール＝ロルミヤン訳は1796年版も1821年版も意識の域を超えており、この文章から想像力を働かせるのはかなり困難である。

しかし『解放されたエルサレム』だけの影響ではないとも言える。「地球の内奥を縦横に走る管や静脈」は『解放されたエルサレム』には書かれていない。それは以前論じたようにこの箇所に関しては、アタナシウス・キルヒャー Athanasius Kircher の『地下世界』*Mundus subterraneus* (1665) の影響があると考えられる。以前論じた時は電子テキストのみを研究対象としたが、その後1678年発行のアムステルダム版を復刻した大型本を入手した。「地球の内奥を縦横に走る管や静脈」を想起させる大判の図版を見ると、その影響を実感する。『オーレリア』第1部第4章の上記の描写は、『解放されたエルサレム』と『地下世界』の両方から影響を受けて執筆したと考えたほうが妥当であろう。(33)

V. 『演劇界』に掲載された劇評

さてここでネルヴァルが私財を投じて出版した『演劇界』*Le Monde dramatique* に目を転じたい。1835年5月に創刊された演劇専門誌であり、週刊で発行された。Gallica で電子テキストが公開されている。しかし1836年にはすでに人手で渡ってしまったことが判明している。なお『演劇界』については過去に多少論じたことがある(34)

第二巻に「パリの興行シルク＝オランピック座 解放されたエルサレム」《Spectacles de Paris Cirque-Olympique La Jérusalem délivrée》という署名なしの記事が掲載されている。(35)第2巻の目次を見ると1835年～1836年演劇シーズン第二期に上演された劇評が掲載されていることがわかる。

該当する演劇の台本によると、1836年3月10日にシルク＝オランピック座で上演されている。台本はフランシス氏 Francis による。(36)なお念のためにこの上演を『興行年鑑』*Almanach des spectacles* で確認した。アルミーダの役でコレージュ Corrège がデビューしたことが記載されている。(37)

さて『演劇界』のこの記事を書いた筆者は演劇『解放されたエルサレム』を激賞している。特に40頭の馬が登場する馬上試合は圧巻であると書いている。音楽を担当したパリス氏、そしてデビューを果たしたコレージュへの賛辞も忘れてはいない。

繰り返しになるが、この記事には署名がない。ネルヴァルはこの雑誌発行に深く関わっているのでこの記事を読んだ可能性は高い。またこの演劇を見たか、またはその話を聞いた可能性もあると

考える。ネルヴァルが『解放されたエルサレム』と関わった直接証拠とはなりえないが、傍証となるであろう。

VI. 結びに代えて

以上論じてきたように、まずネルヴァルがタツソの『解放されたエルサレム』をどのように言及したかを精査した。その過程でネルヴァルの想像力の中で『解放されたエルサレム』が他の文学作品であるヴォルテールの『アンリアッド』と深く絡み合っていることが判明した。

『解放されたエルサレム』のフランス語訳には長い歴史がある。数ある翻訳の中でネルヴァルが参照したと考えられるのはフィリポン・ド・ラ・マドレーヌによる散文訳であろう。しかしパウール＝ロルミヤン訳が訳文としては問題があるが、ネルヴァルがこの文人の名前と業績を知っていたという点から無視はできない。

『解放されたエルサレム』がネルヴァルの『オーレリア』第一部第4章の地球の奥に落ちていく箇所への影響は否定できない。しかしひとつの作品ではなく、複数の書物による影響によってこの箇所が出来上がったと考えるべきであろう。

本論文においても、文学作品のみならず、雑誌、新聞の電子テキスト化が研究の助けになった。今後もネルヴァル研究に有用な諸作品を積極的に探究したいと考える。

注

- (1) 間瀬玲子「ネルヴァルとアタナシウス・キルヒャー」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第6号(2011年1月)、pp.103-114において、ネルヴァルの『オーレリア』第一部第4章の地球の深淵に落ちる際の金属の流れの描写に対するタツソの『解放されたエルサレム』第14歌の影響の可能性を論じた。この論文を執筆した時点においてフィリポン・ド・ラ・マドレーヌによるフランス語訳『解放されたエルサレム』を入手していたが、分析には至らなかった。本論文で初めてこの翻訳を分析するに至った。

タツソ著、A・ジュリアーニ編、鷲平京子訳『エルサレム解放』岩波書店、岩波文庫、2010年の訳注と詳細な解説を参考にした。『解放されたエルサレム』の登場人物の表記は本書に依拠した。イタリアの詩人アルフレード・ジュリアーニ氏が全20歌の『解放されたエルサレム』を約三分の一の量に再編した書物である。

- (2) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1989, p.1090. 以下この巻をPL. Iと略す。フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France の Gallica (電子テキストサイト) から『プレス』紙をダウンロードすることが可能である。1846年10月19日(月曜日)は4枚からなっている。購読料金はパリ、各県、外国の区分で設定されている。各々は1年間、6か月、3か月に区分されている。外国は、イギリス、スペイン、ドイツの連絡先が明記されている。またフランス領アンティル諸島ではサン＝ピエール＝マルチニックが書かれている。なお3ページ目には10月19日の演劇情報が掲載されており、10の劇場における演目が書かれている。そしてその下には19世紀のフランスを代表する作家バルザック Balzac の『人間喜劇全集』*La Comédie humaine* の予約申し込みの宣伝が掲載されている。

プレイヤッド版と電子テキスト版を比較すると、表題の表記の仕方に違いがある。プレイヤッド版は

雑誌や新聞掲載記事に関して、本来の記事を忠実には再現していない。『プレス』紙に関して鹿島茂『新聞王ジラルダン』筑摩書房、ちくま文庫、1997年を参考にした。

- (3) V. de Saint-Hilaire et Michel Delaporte, *Henri IV, drame historique en trois actes, seize tableaux et prologue*, Paris, Imprimerie de Boulé, [1846].
- (4) 間瀬玲子「ネルヴァルの作品における『狂えるオルランド』の影響」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第8号（2013年1月）、pp. 77-88においてヴォルテールの『ラ・アンリアッド』について論じた。なお Voltaire, *La Henriade de M. de Voltaire*, Londres, [s. n.], 1728 (Gallica からダウンロード) の随所に掲載されている挿絵が目を引く。Voltaire, *La Ligue, ou Henry le Grand*, Genève, Jean Mokpap, 1723を Gallica からダウンロードして、参照した。また Voltaire, *La Henriade*, Paris, Gerdès, [1850] (Gallica からダウンロード) 及び Voltaire, *La Henriade*, texte conforme à l'édition définitive présenté par Danièle Thomas, Oloron-Sainte-Marie, Mon Hélios, 2001の解説及び本文の注解を参考にした。ジャン＝フランソワ・デトリー Jean-François Dettori の魅力的な絵が作品に対する理解を助けてくれている。
- (5) Fougeret de Monbron, *La Henriade travestie en vers burlesques*, Paris, P. Plancher, 1817 (Gallica からダウンロード)。Gallica にはこれ以外にも数種類の電子テキストが収録されている。
- (6) PL. I, p. 1881.
- (7) PL. I, p. 1380. この書簡は間瀬玲子「ネルヴァルの作品における『狂えるオルランド』の影響」(前掲論文) の中でも引用した。書簡を訳す際に『ネルヴァル全集 Ⅲ』筑摩書房、1976年に収録された井村実名子訳「書簡」と『ネルヴァル全集 Ⅲ 東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された「書簡」を参考にした。
- (8) Claude Pichois & Michel Brix, *Dictionnaire Nerval*, Tusson, Du Lérot, 2006, pp.369-370の Perrot (Louis)の項目を参考にした。
- (9) Laure Murat, *La Maison du docteur Blanche*, [Paris], JC Lattès, 2001, p.69及び Laure Murat, *La maison du docteur Blanche*, édition revue, Paris, Gallimard, coll. 《folio》, 2013, p.93にネルヴァルがペロー氏に宛てた手紙が引用されている。ロール・ミュラ著、吉田晴美訳『ブランシュ先生の精神病院』原書房、2003年も参考にした。
- (10) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome III, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1993, p. 342. 以下この巻を PL. III と略す。日本語に訳す際に『ネルヴァル全集 I』筑摩書房、1975年に収録された中村真一郎・入沢康夫訳『十月の夜』と『ネルヴァル全集 V 土地の精霊』筑摩書房、1997年に収録された入沢康夫訳『十月の夜』を参考にした。
- (11) Le Tasse, *La Jérusalem délivrée*, traduction, préface et notes par Jean-Michel Gardair, édition revue et corrigée, Paris, Librairie Générale Française, coll. 《Le Livre de Poche-Bibliothèque classique》, 1996, pp.66-67にフランス語訳の一覧表が掲載されている。また随所に参考とすべき絵画も掲載されている。Le Tasse, *Jérusalem libérée*, texte présenté, traduit et annoté par Michel Orcel, Paris, Gallimard, coll. 《folio classique》, 2002には詳細な注と書誌が掲載されている。Le Tasse, *La Jérusalem délivrée*, présentation, notes chronologie et bibliographie par Françoise Graziani, traduction par Charles-François Lebrun, Paris, GF Flammarion, 1997も参考にした。この本は1774年のルブラン訳を採用している。以上が現在販売されているポケット版である。
- (12) Gérard de Nerval, *Aurélia ou le rêve et la vie, lettres d'amour*, édition établie et présentée par Jean Richer, Paris, Minard, 1965, p.19に言及されている。本書はかなり忘れられた書物となっているが、まだ学ぶべき点はあると考えている。
- (13) *La Jérusalem délivrée*, traduction nouvelle et en prose par M.V. Philipon de la Madelaine, augmentée d'une description de Jérusalem par M. de Lamartine, édition illustrée par MM. Baron et C. Nanteuil,

- Paris, Mallet, 1841. 以下 JDPM と略す。
- (14) 間瀬玲子「ジェラルド・ド・ネルヴァルとセレストアン・ナントウイユ」『筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所年報』第22号（2011年）、pp. 163-176においてセレストアン・ナントウイユについて論じた。
- (15) JDPM, en regard de la page, p. 345. 挿絵の目次の表記をそのまま転記した。目次には「水の上を歩く一人の老人」と書かれている。
- (16) JDPM, p. 346.
- (17) JDPM, en regard de la page, p. 374. 挿絵の目次には「アルミーダの宮殿内の二人の戦士」と書かれている。
- (18) JDPM, en regard de la page, p. 392. 挿絵の目次には「リナルドがアルミードと別れる」と書かれている。
- (19) *La Jérusalem délivrée en vers français* par L.P.M.F. Baour-Lormian, tome premier et tome second, Paris, l'Auteur, 1796. 以後2巻を JDBL (1796)II と略す。Gallica に収録された電子テキストを Hachette Livre が書籍として販売している。また *La Jérusalem délivrée*, traduite en vers français par P.L.M Baour-Lormian de l'Académie française, seconde édition, revue et corrigée, tome premier et tome second, Paris, Ambroise Tardieu, 1821も参考にした。以後2巻目を JDBL (1821) II と略す。なおアカデミー・フランセーズの公式ウェブサイトがパウール＝ロルミヤンの略歴を紹介している (<http://www.adademie-francaise.fr>)。
- (20) PL. I, p.141. この記事を翻訳する際、『ネルヴァル全集 I 文壇への登場』筑摩書房、2001年に収録された田村毅訳「アカデミー あるいは見いだせぬ会員たち 一幕韻文風刺喜劇」を参考にした。「ヴィレール氏宛て書簡」《Épître à M. de Villèle》にもパウール＝ロルミヤンが言及されている (PL. I, p.197 と『ネルヴァル全集 I 文壇への登場』2001年 (前掲書) の田村毅訳「偉人の料理人」)。
- (21) PL. I, p.842. この記事を訳す際に『ネルヴァル全集Ⅲ』1976年 (前掲書) に収録された稲生永訳・註と『ネルヴァル全集 IV 幻視と綺想』筑摩書房、1999年に収録された阪口勝弘訳「ディオラマ、オデオン座」を参考にした。なお Gallica から記事 (*L'Artiste Beaux-Arts et Belles-Lettres*, 4^e série—tome II, Paris, Aux Bureaux de l'Artiste, 1844, p.47) をダウンロードして違いがないかどうかを確認した。『アルチスト』誌では poète という昔の綴りが使われている。
- (22) PL. I, p.1818. プレイヤッド版の編者が注の中で引用した *Théophile Gautier, Fusains et Eaux-Fortes*, Paris, Charpentier, 1880 (Gallica からダウンロード) に収録された文章を読むと、ダヴィッドと彼の友人の中の一人の文学者の会話としてほぼ同じような内容が書かれている。つまりパウール・ロルミヤンが言及されていない。ネルヴァルの友人であるゴーチエのこの文章はもともと1837年9月17日の『1830年憲章』紙 *La Charte de 1830* に掲載された。ネルヴァルも『1830年憲章』の他の号に記事を掲載している。
- (23) *Jérusalem délivrée opéra en cinq actes*, Paris, Roulet, libraire de l'Académie Impériale de Musique, 1812を Gallica を経由してトゥールーズ大学のサイトからダウンロードした。また *Jérusalem délivrée opéra en cinq actes*, Paris, Roulet, libraire de l'Académie Impériale de Musique, 1813の廉価版を入手した。
- (24) Gérard de Nerval, *Aurélia*, p.19 (注12において引用した書籍)。『ネルヴァル全集 Ⅲ』1976年 (前掲書) p. 82に本書の注の翻訳が掲載されている。
- (25) PL. III, p. 451. 翻訳する際に『ネルヴァル全集 II』筑摩書房、1975年に収録された入沢康夫訳『火の娘たち』と『ネルヴァル全集 V 土地の精霊』1997年 (前掲書) に収録された中村真一郎・入沢康夫訳『火の娘たち』を参考にした。
- (26) PL. III, p. 1193.
- (27) PL. III, p. 703. 翻訳する際に『ネルヴァル全集 Ⅲ』1976年 (前掲書) に収録された佐藤正彰訳『オー

レリア』と『ネルヴァル全集 VI 夢と狂気』筑摩書房、2003年に収録された田村毅訳『オーレリア
あるいは夢と人生』を参考にした。

- ⑳ JDBL (1796) II, p. 95
- ㉑ JDBL (1821) II, p. 107.
- ㉒ JDPM, p. 345.
- ㉓ Le Tasse, *La Jérusalem délivrée, Gerusalemme liberata*, Édition bilingue, introduction, traduction, biographie, bibliographie, glossaire, index de Jean-Michel Gardaire, Bordas, 《Classiques Garnier》, 1990, p.781. 注11で紹介したリーヴル・ド・ポッシュ版の編者が刊行した対訳本である。
- ㉔ 『エルサレム解放』岩波文庫（前掲書）， p. 361.
- ㉕ 間瀬玲子「ネルヴァルとアタナシウス・キルヒャー」（前掲論文）。Athanasius Kircher, *Mundus subterraneus*, Bologna, Forni, 2011を参照した。Gallica に収録されている1668年発行のアムステルダム版もダウンロードして確認した。
- ㉖ 間瀬玲子「ジェラルド・ド・ネルヴァルとセレスタン・ナントゥイユ」（前掲論文）， pp. 168-169。
なお Claude Pichois & Michel Brix, *Dictionnaire Nerval*, pp. 325-328（前掲書）の *Monde dramatique (Le)* の項目にかなり詳しく出版状況が記載されている。
- ㉗ *Le Monde dramatique*, tome II, Paris, Au Bureau du Monde dramatique, 1835, pp. 283-284（Gallica からダウンロードした）。1冊1冊の雑誌を電子化しているのではなく、まとまった形で電子化している。
なお廉価版が販売されているので入手した。第2巻は1835年発行と記載されているが、目次には1836年に上演された演劇に関する記事の題名が記載されている。
- ㉘ *Magasin théâtral, choix de pièces nouvelles*, tome douzième, Paris, Marchant, 1836.
- ㉙ *Almanach des spectacles de 1837 à 1838 et rappel de 1836*, Paris, Barba, 1837, p.121.

謝辞：本研究は JSPS 科研費25370391の助成を受けたものです。

（ませ れいこ：英語メディア学科 教授）